山東京傳作

播州皿屋敷物語

特
へ13
3865

特
へ13
345

# 前編上冊

## 自序

江戸辨慶橋地本問屋丸屋文右衛門刊行

あゝ宗祖のやごとなきありまゝ悟よ悟ゞす陰とおもふべき心もなく盆かごふひなをつぶし夜を仕支よ灯械乃油とつひや目をのやみそんぐれどこの功もなく贈の能もなく河童のわらはのごとく唯氣水をへらして弱るのこゝろとそ阿房といふべき毒くらべ呆れぶりと案つる屋敷の昔話一ッ二ッ三ッ四ッ五ッ六ッの六冊物十人前更不足どかゝき役の顔青くわな支師い顔赤く實支師も顔白く善悪邪正をかきまぜる繪の具をばなべてん

文化七年庚午六月稿成
八年辛未新繪草紙

山東庵京傳誌

漢土
日本

天竺
九族天よ生ぐるぶ
養頂陀
者
尊者

久米山鉄山　侍女於陸　三輪右衛門

折行よ　晋其角　壬生の里の焼物師　錦手の土仕

蟬一子　闇九郎　恐の者



神崎陳内　萱を兒姫　壬生次郎

赤右衛門　実ハ佐伯鹿の家臣　飾磨の褐藏

都五条坂の白拍子　微妙　后よみ女ぞ奴の小さん

妻八

# 細富軒龜圖

小ぞう
物の名の蛸つ
古狸
いつのぞう
後
芋村蛸平太
金唐革の銅舌坊
蟬太郎

神崎
陳内

掛物かなづせ
せど村雀
描州佐保鹿の家臣
船瀬壬生次郎
四年の息女

播州佐保鹿の
執権職久米山鉄山

ひさろのつるぐ鉄峨よ
害せーるその怨念井のうらこそしづまれ。

# 前編中冊

▲ここへ入れんをあーこれがのんでさんけいーるをけいのこのまちをのこのひのおき日あれてすこしろくしこいれ

# 前編下冊

まんのつづき

まんのつづき

京四条河原之体

# 春扇畫

## 山東京傳作

筆耕 徳瓶

まへのつゞき　せこちらへ
ちんとのあごをのせきよろ
り女ぼんをさそりしゞあるれ
おさるのまねしのひらくるれ「これせを
ちゞりとおもふうのあてさる
ゞゞさるのめのめい時
なれがしり〳〵のおもう
まろ〳〵ゝとそれて
とてきそつ且てきさ
ちゝろとわをそへのそ
せんうかそろかとに
そろくいちろくのま
此のれをさしまつて
うゝゝぞとそんな
やきぼんなとかの
人形やのわんゝんが
のれをとにせを
ちゝをきさせおれ
そのちゝろゝとへ
此ゝまやく此時
おらゝんいの
さのくれさのいろて
ちゞとそのんでおはしゞ
せをちゝろゞんぜのく
そろくとちゝろふいり
これおちさねおをきねが
くるおいざちゝのま
こんにおらそざされと

これおちさねくの
ん女をとのそ



■ 下のとき

こよ
そさ
れぬ
ろと
むしゃれだ
あらそりん
これそさてみとそ
りあのりくんそろやのれのおあろさんとんのめんを
やゝりくんそろやのれのおあろさんとんのめんを
ひおちゞかかてあろとごみせときそ〳〵ゝくおも
きんゝとれもこちやゝやゝやゝかゝさおのうれに
ようあさおのんゝカカーいくくとうんそくいの
〳〵テムこととーことをんのーゞかんかかゝさみの
ひりんんんようやとう〳〵アイもをーやゝてさみに
ろりんはゝーとこんゝやかゝさみゞあんとゝろ
そもやとふーそ〳〵アイさうのきんゝよを
人まにかゝってもをーやりまーゝときいて
あろえりんろれにあゞんあることろれだ
ぎろうりとゝをにこゝへさてんとおゝ
ゝうわゝれおゞゝくゝれをあろりーゞ心を
もゞあひれよせて「こつゝやがんよそちが
かゝさ女人なれかゝつてまんゝとゝろえあやの
ろゝ元をそこやろるまものがろりやうゝきん
ろゝろ〳〵アイそのゝゝ元ろうちさにようて
あゞさなとろちよに

面打

播州皿屋敷全六冊大尾

# 女舞之圖

春扇畫

# 山東京傳作


丸屋文右衛門板
後編文化七午十月稿成



明治四年辛未三月再仕立直

印傳屋所持